# 熊本城天守閣被災状況再現模型制作報告書

二〇二一年三月

城郭模型製作工房
島　充

# ■模型の概要

この模型は平成二十八年熊本地震による、熊本城天守閣の被災状況を再現したものである。

再現範囲は大小天守閣と石門周辺の石垣崩落域を含めた東西七五メートル、南北九〇メートルの区域で、御裏五階櫓跡、御肴部屋櫓跡、耕作櫓門跡、御宝蔵跡付近を結んだ範囲を切り取っている。

再現時期は平成二十八年四月十六日の本震直後を想定している。

模型は城域測量図と標高値をもとに地面の高低を造形し、天守閣の建物は株式会社大林組による「熊本城天守閣復旧整備工事実施設計図」や昭和三十五年の意匠図および構造図をもとに、被災前の写真を参考に修正を加えて造型した上で、熊本市より提供を受けた被災直後の写真、手持ちカメラによる記録映像、ドローンによる上空からの写真及び映像、石垣被害を記録したオルソ画像などを資料に、被災直後に天守閣を目にした方からの聞き取りも行い、熊本地震による大小天守閣付近の被害を可能な限り忠実に模型上に反映し表現している。

復旧・修復に伴って失われた被災直後の状況を克明に記録すると同時に、観覧者に自然災害の威力を感じ取ってもらうため、色彩や質感まで臨場感を持って伝わることを目指して制作した。

［寸法］

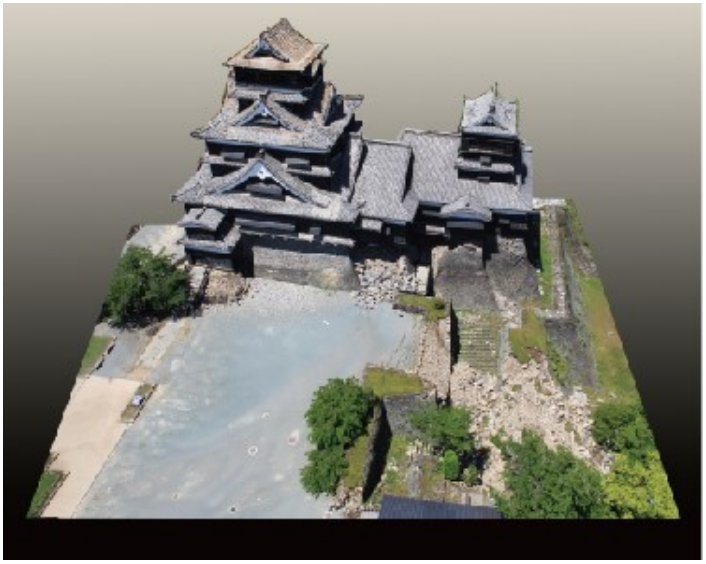
幅　６００㎜
奥行　５００㎜
高さ　３３４㎜

［縮尺］

１５０分の１

# ■模型制作の経緯

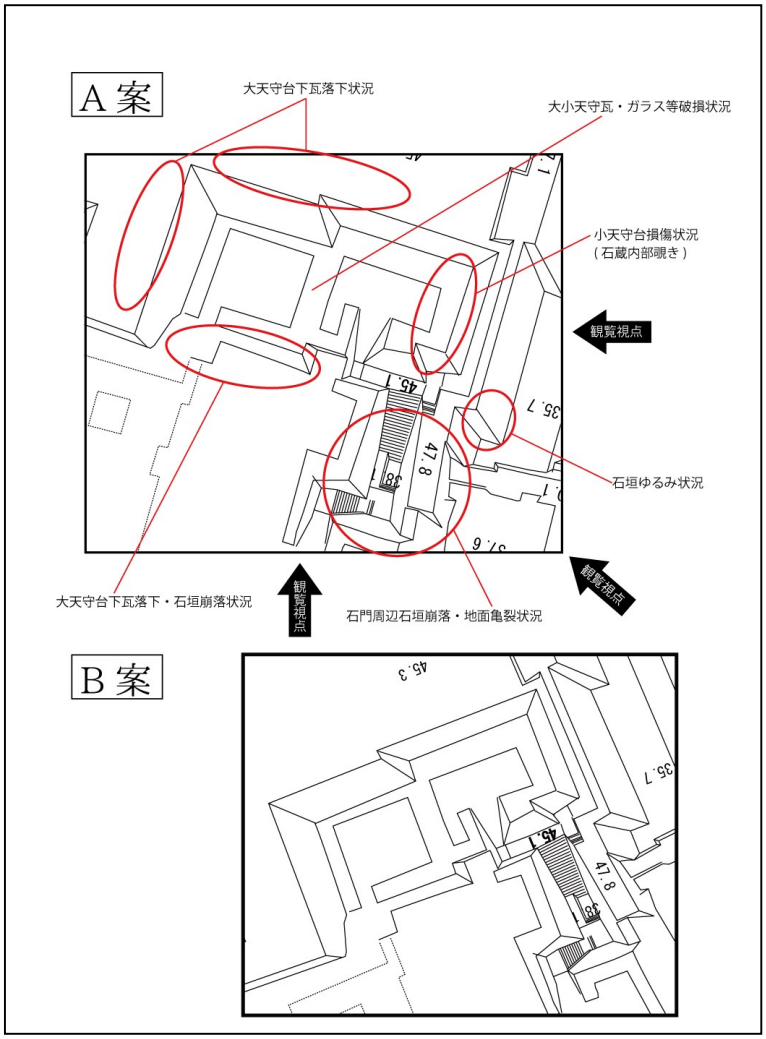
## 二〇一九年



▲模型完成イメージ(2019 年 12 月 24 日提出)

[レイアウトの決定]

展示場所の環境から、全体を斜めに振った構図にすることで、観覧者の鑑賞範囲を広げる工夫を考えた上で、A・Bの二案を提出、A案で決定となる。



## 二〇二〇年

▲組み上がったMDF骨格

[設計]

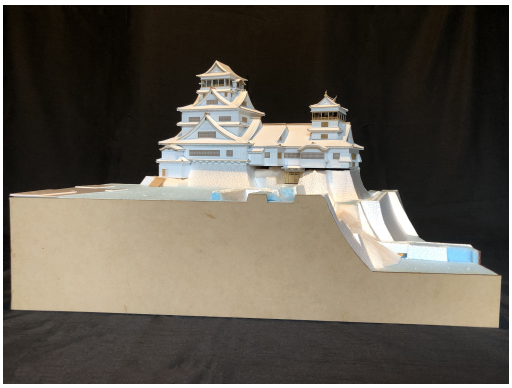
提供資料を基に、再現範囲における被災状況の全容を把握し、いかに模型上で表現するかを構想後、七月より設計に入る。模型の精度を上げるため、模型の地面及び天守閣の骨格にはMDF材をレーザーカットして組み上げることとした。復旧整備工事実施設計図を基本に模型断面図を作成、これに従って骨格のパーツを設計した。

[エッチング(金属)パーツ]

外装においては、エッチングパーツを多用することで精度を上げることを狙った。エッチングパーツの設計は大分の安藤幸太郎氏(石屋模型店)の手に委ねたが、小天守一階東側張り出しの唐破風など図面の形状が明らかに違う箇所、大小両天守閣最上階のサッシや避雷針等、図面に反映されていない箇所のパーツ化には実景の写真をもとにせねばならず困難を伴った。制作を進める中で修正点が出ることがあるため、エッチングパーツの製造は三回に分けた。

エッチングパーツで起こした部品は次の通りである。

**軒瓦・鬼瓦・隅木蓋瓦・破風板・懸魚・六葉・狭間・大小天守最上階外装軸部・サッシ・内部手摺・窓格子・窓枠・突き上げ戸・小天守入口門扉・忍び返し・避雷針・大天守付櫓外部階段手摺・小天守入口前橋手摺**



▲白模型完成(2020 年 12 月 28 日)

## 二〇二一年

[組立・制作]

九月より、骨格の組み上げを開始する。外装は建築模型材料のプラスチック材を使用した。

規格材料を使用しているため、部材は正確な縮小値を反映できていない箇所もあるが、実景の写真を参考に、近似値の材料の中からより実感の近いものを選択して使用している。屋根瓦は実際の密度感に近づけるために厳密な縮小値より若干間隔を狭くしたため、数は正確ではない。

十二月二十八日に白模型の状態で造形が完了した。

[彩色と被災表現]

彩色と被災表現はこの模型の要であり、実際の展示環境において最も効果的な見え方をするように考慮して、スケールエフェクトを勘案しつつ彩色を進めた。

被災した状況の造形にあたっては、それぞれの箇所を必ず写真と照合しながら造形を進め、強調やデフォルメ、様式化、省略など主観的な演出は極力行わないよう、冷静に「記録する」態度を取った。

一月三十一日に完成報告を行い、その後微調整を加え、二月二十五日に納入となった。

# ■模型制作を終えて

歴史的な大地震であった熊本地震を後世に伝えることは、地震に巡り合った私たちの使命である。阿蘇の数鹿流崩れや阿蘇大橋の「残った橋桁」は被災状況そのものが震災遺構として地震の事実を伝える物となる。同じように、熊本のシンボルである熊本城が被災した姿も、まさに熊本地震の象徴的な光景であるが、今後復旧・修復が進められる中で、傷ついた姿を目にすることはできなくなる。じじつ、天守閣が被災した姿は、現在では写真や映像の中でしか見ることはできない。

しかし、その写真や映像も、実は極めて断片的なものである。模型制作を通じて、天守閣周辺の限られた範囲を再現するために、百を超える写真や映像が必要であった。それだけの記録をもとにしても、完全な再現には至っていない箇所もある。

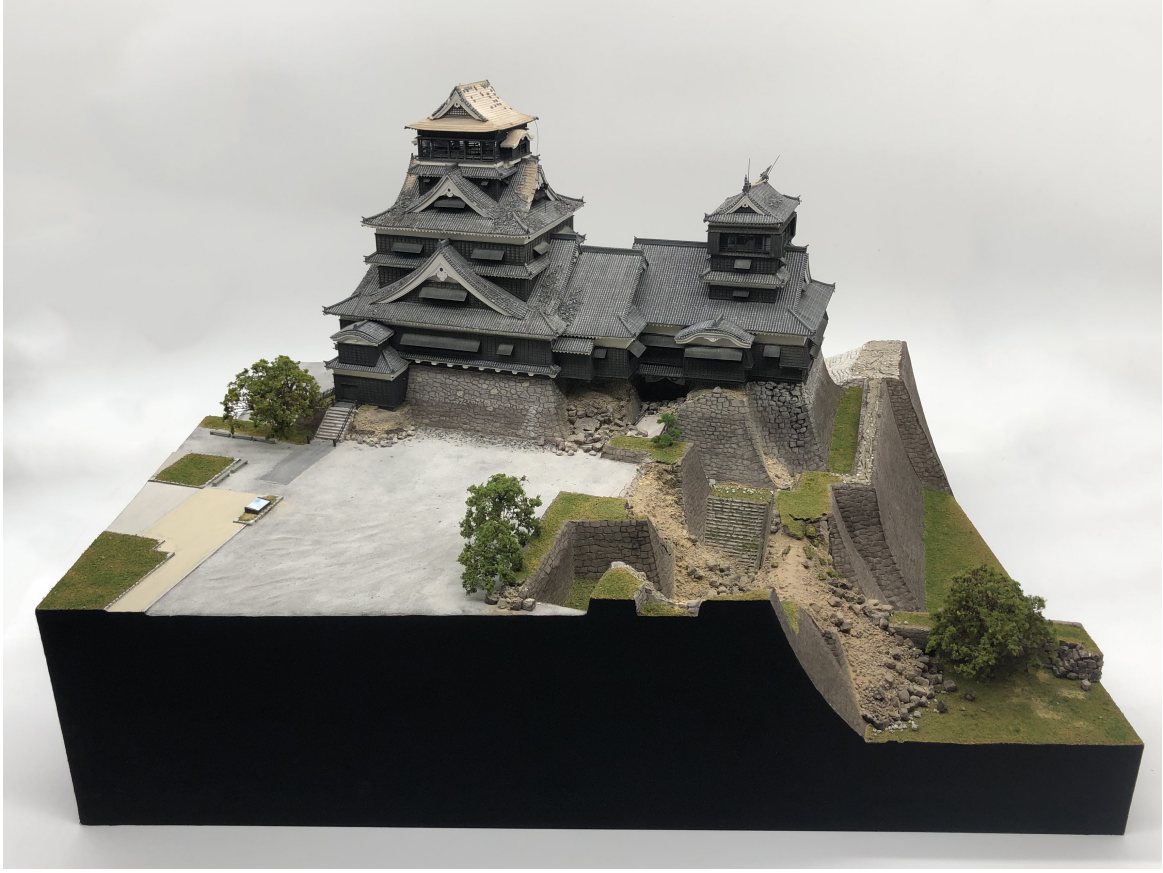
この模型は、それら断片的な情報を一つの「もの」の中に再統合・再構築したものであり、視点を変えるだけで必要な情報にアクセスできる記録メディアとしての役割も果たしているかもしれない。

今回、最も苦慮したのは、自分自身が被災直後のようすを目にしていないという事実である。展示を通して地震を経験していない方にも(つまり後世へも)地震の様相を伝える目的を果たすのに、制作者自身が直接経験していない第三者であるというのは厳しい現実であった。しかしながら、第三者であるからこそ、かえって主観や感情を排して記録物を忠実に写し取ることに徹することができるかもしれないとの思いで完成させるに至った。

今後、実際に被災直後の様相を目にした方の証言をもとに手を加えることも可能であるし、写真や映像には記録されていない記憶を反映させることもできるであろう。

▲石門外より(外光撮影・同アングルでピントをずらして撮影した 6 枚の写真を合成)

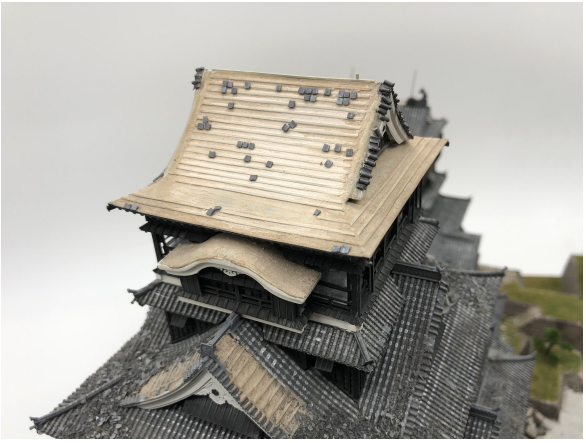
▲天守前広場より(外光撮影)



▲模型正面より全体像

▲大天守上層部

▲大天守周辺



▲大天守最上階屋根

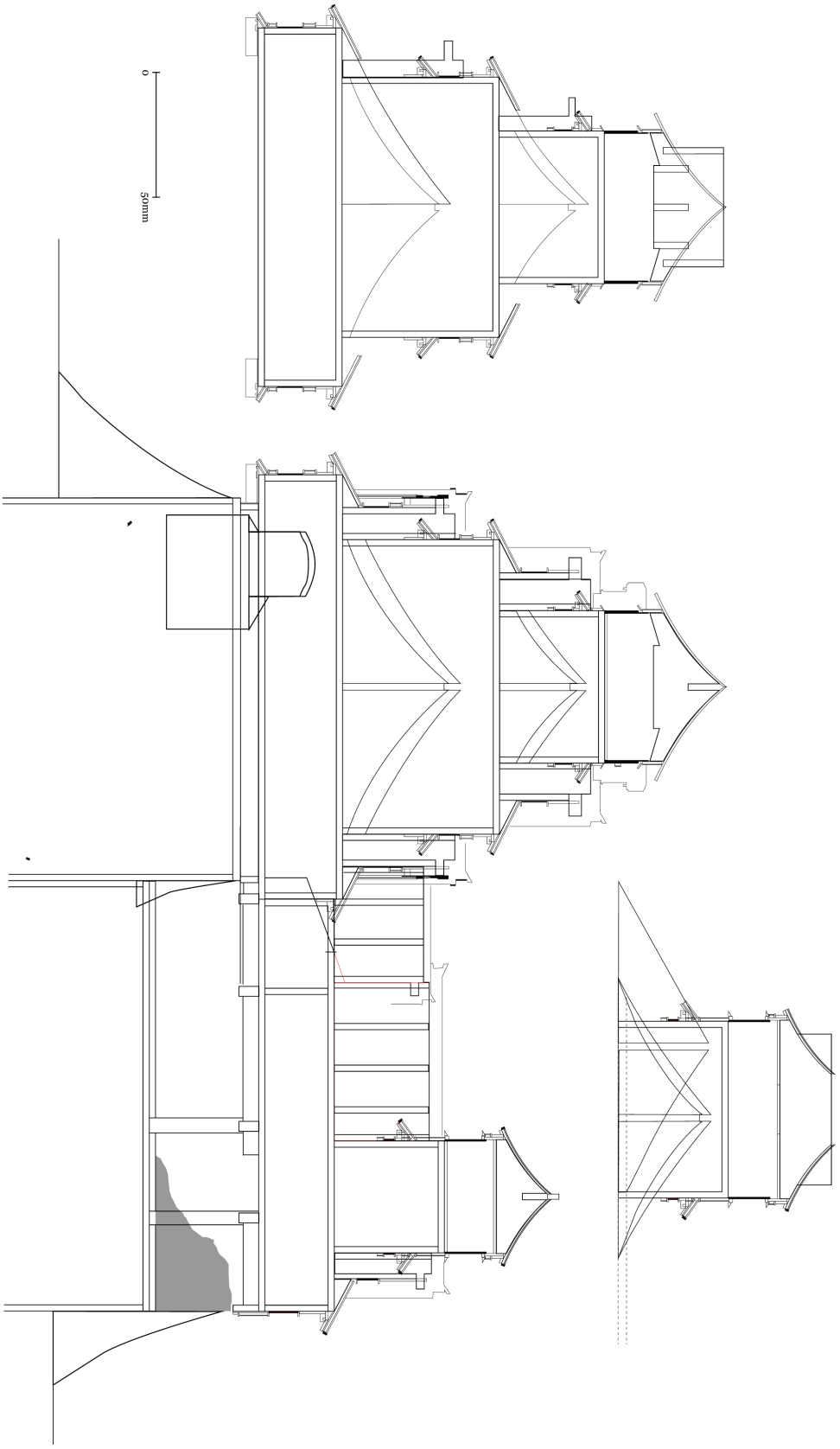
▲小天守

▲石垣の被害

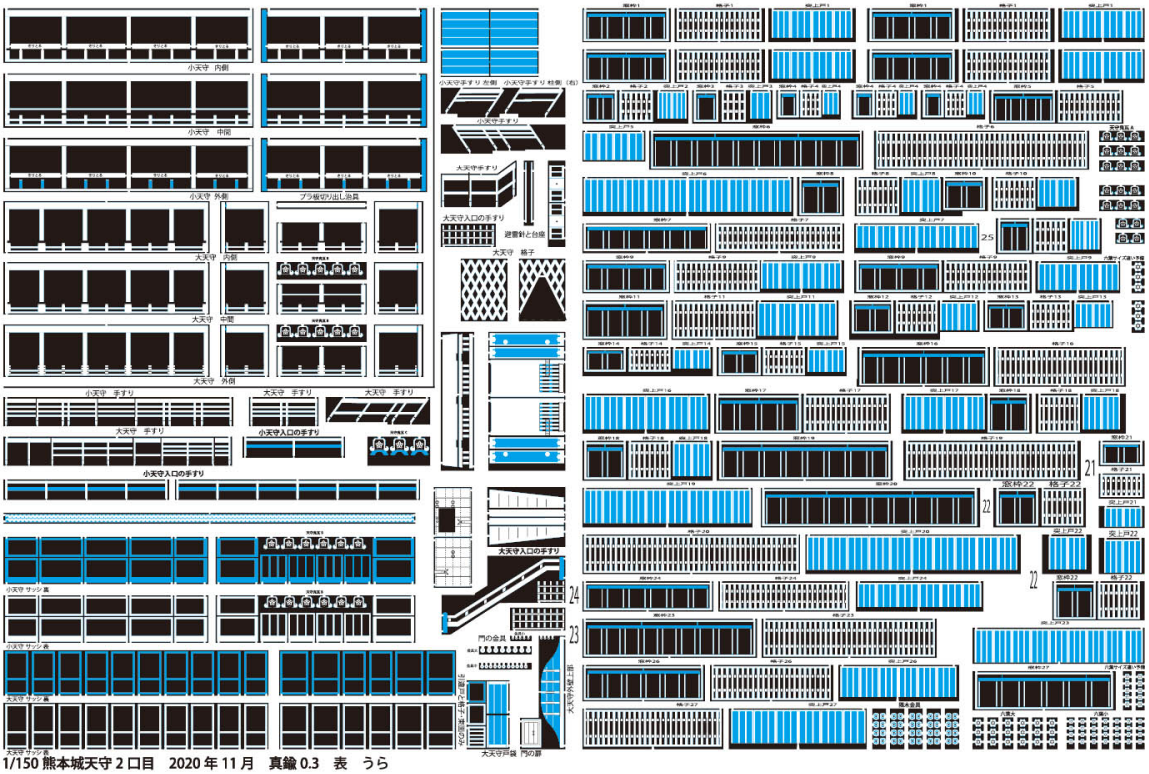
▲小天守入口周辺の石垣崩落

▲石門周辺の石垣崩落

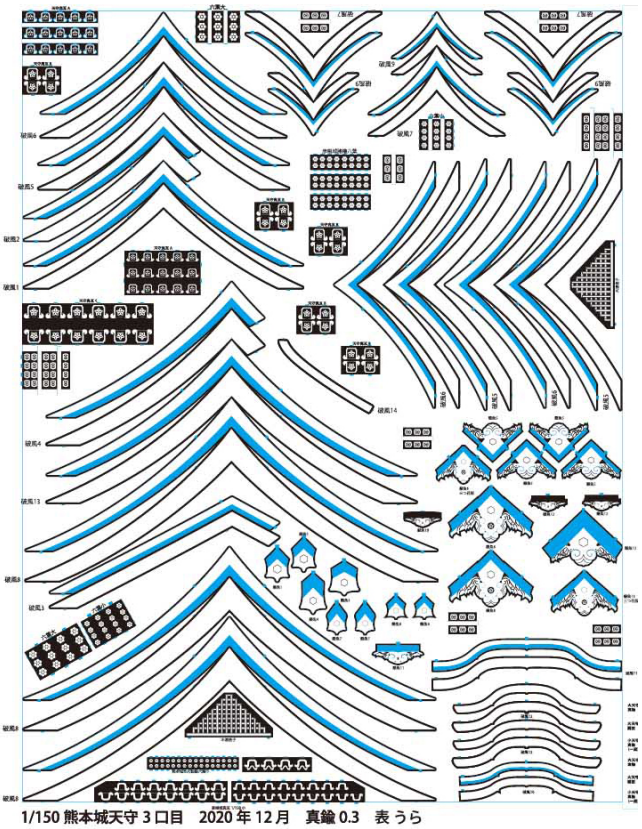
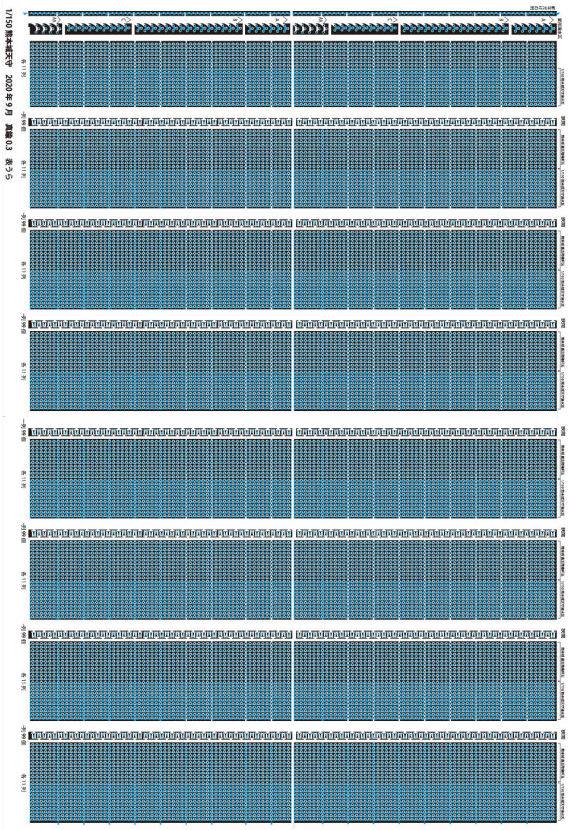
模型構造図



エッチング部品図



1/150 熊本城天守 2 口目　2020 年 11 月　真鍮 0.3　表　うら



1/150 熊本城天守 3 口目　2020 年 12 月　真鍮 0.3　表うら